

「カパル 2018-2021 年度活動、加藤総括」の説明

作成：加藤剛（20240407）

1. 「カパル 2018-21 年度活動、加藤総括」（以下「総括」）は、加藤剛・倉沢愛子がインドネシア研究懇話会（カパル）の共同代表を務めた 2018 年度から 2021 年度までのカパルの運営と活動について加藤が総括したものである。

2. 「総括」の目次（「総括」、pp. 2-4）をみれば分かる通り、内容は個々の活動についてというよりは、どのような目的でカパルを立ち上げ、どのような試行錯誤があり、いかなる課題があるかを纏めたものである。カパル運営委員ならびにカパル・メーリングリストメンバーにとって、カパルのよりよき将来を共に考える上での一助となれば幸いである。

3. 8 万字に近い長文の「総括」は、内容的に大きく 3 つに分かれる。「Ⅰ カパルで考えたこと・試みたこと」pp.5-13 では、カパルをどのような集まりにしたいと思っていたか/思っているかを記した。

4. 「Ⅲ カパルとカパル運営委員会の在り方をめぐって」pp.52-65 は、カパルの 2022 年度末時点での組織的特徴を振り返り検討したものである。カパルは、学会とも規模の小さな研究会とも異なる「集まり」である。具体的には、学会員のような制度的に規定されたメンバーを持たない一方、2018 年 12 月の設立記念大会・第 1 回研究大会時のカパル・メーリングリストの登録者は 298、研究大会参加事前登録者数は 146 というように、規模の大きな「集まり」である。このような「集まり」をどのように組織し、運営していくかのモデルは見当たらない。2018 年度からの最初の 4 年度間は、いわば見習い運転をしながら自ら運転教本を書くようなところがあった。「Ⅲ」では、この点について、東南アジア学会とフィリピン研究会という、性格も建て付けもカパルと異なるふたつの「組織」と対照させながら自分なりに考えたことを纏めた。

5. 「総括」の中で最も長いのは、中間にある「Ⅱ 6 つの担当分野をめぐる「思考」/「試行」と「錯誤」」pp.13-52 である。タイトルにある通り、現在のカパル運営委員会にみられる 6 つの担当分野、すなわち情報、大会プログラム、大会実行、総務、会計、ウェブサイトのそれぞれに関わる総括と提案である。それだけに記述が長くなった。この部分を読み下す必要はない。新たに運営委員になった人が、自らの担当の役割を理解する上で、当該担当の記述が参考になればと願う。

6. 「総括」の纏めを終えたのは2022年5月上旬である。これは同年5月14日に、それまでの4年度間に運営委員を務めたことのある前委員、元委員に送付し、鏡味治也2022-23年度代表にはccで送り、別のメールで2022-23年度運営委員への配布をお願いした。新体制において「総括」が少しでも役に立てばと考えたからである。

7. この説明文は、元々は上記2022年5月14日送付のフォルダー群のために認めたものである。今回、佐藤百合代表、長津一史副代表の下で2024-25年度カバル運営委員会が立ち上がるのを機に、以前纏めたフォルダー群を再整理し、フォルダー・ファイル・目次などの名称の一部をより分かり易く整理し直し、同時にこの説明文にも必要な修正を加えたものである。ただし、「総括」本文の文章に手を加えることはしていない。

8. 「総括」には、2018-21年度のカバル運営委員会議事録に類する文書は添付されていない。しかしながら、カバル・ウェブサイトのカテゴリー「懇話会について」>「カバル航海録（運営委員会報告）」には、2018年度から2021年12月19日第3回研究大会開催時までの、運営委員会等活動のかなり詳しい記録を各年度の運営委員会報告（パワーポイントPDF版）として載せた。とくに2020年と2021年の運営委員会報告では、2022年度の代表交代を見越して、設立記念大会・第1回研究大会以降の運営委員の選任方法と運営委員会の構成について紹介し、運営委員会等の活動についても説明している。

以上